

---

## 未来を掴むために...

見たら死ぬ死神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来を掴むために…

### 【Nコード】

N6550J

### 【作者名】

見たら死ぬ死神

### 【あらすじ】

平凡な高校生が巻き込まれたサバイバルゲーム。そこではロボットによる何でもアリの殺し合い。そこで何を思い、どうしていくのか…。

## プロローグ（前書き）

皆さんこんにちは。見たら死ぬ死神です。初投稿で、何かと誤字やら駄文やらあると思いますが暖かい目で見てくださいとありがたいです。感想、アドバイス何でも受け付けますのでよろしくお願いします。o(^-^)

## プロローグ

そこは暗闇の続く世界だった…。

俺はそこに一人たたずんでいた…。

体はベルトか何かで固定されている。

手に握るは操縦棒…それもその筈俺は機械に乗せられていた…

丁度小一時間前…

俺こと白神 翼は学校帰りだった。

「はあく、高校三年。受験も終わった俺が何故に授業出なきやあかんかねえ。」そう呟きながら路地裏で近道をしようとしたとき目の前にブラックホールがあつた。

「なんだよ！？こりゃあ！」

ブラックホールに吸引されそうな俺は必死に逃げようと踏ん張るが…吸引が半端なかつた(汗)

「これなんてダイソン！？うわあああ！？」

健闘虚しくブラックホールの中へ…

……………。

「いつつ…何処だここ？」

いつの間にか俺は辺りが真っ暗な所にいた。自分の体はよく見えるがそれ以外は何も見えない。

すると、前から声がする。人の声だ。



## プロローグ（後書き）

初投稿いかがでしたでしょうか？感想お待ちしております。

さてここですが、主人公が搭乗するロボット以外にこれから出して欲しいロボットを募集しようと思います！作品は主にガンダム系、スパロボOG系（これはスーパー系ありで）、ギアス等のリアル系列で。

スーパー系があると戦闘能力差でとんでもない事になりかねないので今回はなしです。すみません。しかし、書いてく内に必要とあらば入れます。

## 第一話 これからすること（前書き）

どうも。さっそく一話上げました。まだ小説書いて駄文作りやっ  
てるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします。

## 第一話 これからすること

前回、突然ブラックホールに吸い込まれた白神 翼は目の前の神の使い（マ○ター○ンドモドキ）から死亡フラグありまくりのサバイバルに参加させられる事になった…。

え〜と、……何ですかこれ？今日も普通に学校生活送って友達と話して家帰ってゲームしようとしただけなのに。俺罰当たりな事したか？

はあ〜、こんな事なら早く連ザクリアしとくんだった…。（泣）後彼女orz

「オーイ、話は終わってないぞ。」  
手がヒラヒラ手招きしとる。嘗められたみたいでムカつく。  
まあ、落ち込んでもうどうにもならないのは知っているからな。手の話聞くしかない。

「それで、詳しい内容は？それと目的。」

「よく聞いてくれた。このサバイバルバトルの目的は、ズバリ人の生きる力を見るだ。」

意味ありげな言葉だ

「生きる力だと？何だそりゃ？」

俺の疑問に手は両手を叩き、前にスクリーンを出した。するとそこにはごく最近の犯罪やら俺の時代が映されていた。

「いやはや、神様が最近の人はやたら生命力、活力も無く死んでしまふ事が多いと見ていてね。自殺とか多いでしょ？で、今の人間は命をどう思ってるか確かめたくなつたと…」

「そこでその人の生きる力とやらを見るためにやる事が…」

「そう、このロボットサバイバルバトルだ。」

手が縦に揺れて相槌を打つ。

なるほどね。しかし、何で俺なのか…。俺はただの一般 people ですよー。

そして、手はそれを見越したかの様に言った。

「君は命に対する執着心が人一倍強い。それが、今回選ばれた理由さ。」

「!?!?!」

何だと!?!何故こいつがその事を知っている？

「まさか、お前俺の過去知ってるな!?!」

手に掴みかかろうとしたが、失敗した。手は軽やかなステップを刻みながら小馬鹿にするように俺を見下ろしていた。

「そう捉えられても構わない。けど、君はそういう事で神様に選ばれた。そして、このゲーム…いや戦争からは逃れる事は出来ない。生きて帰りたければ生に執着するんだな。」

顔とかが無いにしろとてつもないオーラで語りかけてきた。

まじで、恨むぜ神様よお…。

「分かった。やってやるさ。こちらとて死ぬ訳にはいかないんでな。」  
「ここまで来たら、やるしかない。もし死んだらそこまでだ。だから生きているうちにできることしなくちゃな。」

「所で機体はどうすんだ？」  
「そんな質問を投げ掛けてみる。」  
すると、手が指パツチンするとその横から猛スピードで何かが来た。あれは…

「ロボットか？」

そう呟いた瞬間ハンガーごとロボットの行列が俺と手の両脇に並んで停止した。

「はい。この中から好きな機体を選んで。意志にすれば柵が動くから。」

何と便利な…。それにしても沢山あるな。…あれ？

「スーパー系ねえよ。」

「文句は作者へ（笑）」

『作者「スーパー系？聞こえんなあ？」』  
何かそんな声が聞こえた気がしたが気のせいかな。仕方ない。

「じゃあ、こいつでどうだ？」  
俺の意志を通してハンガーが動く。停止した先にはKMFが立って

いた。かの有名なランスロットアルビオンである。白金色のその機体はブリタニアKMF最強の名に相応しい威厳を放ちつつある。手が近づいて話し掛けてくる。

「操縦法はコックピットに座ったら頭に入る方式だから」

言われた通りハンガーを登りコックピットに座る。ランスロットの中に入り、中にあった起動キーを挿し計器を確認する。

「エナジーファイラーゲージ、武器、残弾数、ブーストゲージ、シールドエナジーゲージ、操縦棒、ボタン各種……ほんとかよ？全部分かる」

兵器にすら乗った事も無い自分がここまで分かるのに俺は変な気持ちになった。

ある程度一定の動作を確認してみる。腕、脚、エナジーウイング開閉、ランドスピナー……。

「スペック通りの機体だ。ピーキーなのが何とも言えないな。」

「OSの調整は君が合わせるんだ。やり方は既にインプットされるはずだ。」

手がそう言うが、体感で感じる程度は心配ないので後に回すことにした。

「その機体でいいかい？」

「ああ、問題ない。ランスロットに決定だ。」

コックピット越しに返事を送ると、手が説明しようとして上に登ってくる。そして、画面を出して説明する。

「君はこれから20人とその他多数によるサバイバルバトルに参加

してもらおう。ルールは簡単。敵と認識したものの撃墜だ。但し、君を含めた指定された20人から仲間を作りチームとして勝利する方法もある。もちろん、裏切りもあるからそこは充分注意してね。そして、一番最大の注意事項は…死んだらそこでゲームオーバーだ。これはリアルな殺し合いだからゲームなんて単語自体使うものではないが、君達にはそれが分かりやすいから。命を投げ出しちゃ駄目だよ。」

そこまで聞いた俺はこれからの事に不安や期待が渦巻いていた。要はこいつらは人を殺してこいと言っているもんだ。だが、拒否権はない。断れば最悪殺されるだろうし、このまま戦場に行けば敵に殺される…。逆に首尾よく行けば生き残れる。後は、自分の問題だ。そこまで考えて俺は深呼吸をして気持ちを切り替えた。そして、案内してくれた手に言葉を返した。

「ここまでありがとな。アンタ、神の使いなのに人間臭いんだな。」  
手から笑い声が聞こえた。う〜ん。シユールwww。

「ふふふ、私の事を人間臭いなんて言ったのは君が初めてだよ。そうなのかもしれないな。私は人間をまだどこかで諦めてないのかもな。」

えっ、それってどういう…。

「おっと、そこまでだ。君の言いたいことはあるだろうけど、後は自分で探さなきゃ。」

そう言って手は人差し指を立てて横に振る。

「そうか。後、それと…」

「何だい？」

「俺は諦めない。生きる力、アンタらに見せてやるよ。何処までも足掻いてやる！」

そう言つて拳を握り前にかざす。それに答えるかの様に向こうも握り拳をする。

「うん。いい心掛けだ。さあ、そろそろ行こうか。」

手が両手を合わせると暗闇にゲートが出来る。

ランスロットのインジケータ等を確認しながら呟く。（ヤッテミタ

カタダケー

「MEブースト…！」

手がそれに合わせて宣言。

「ランスロットアルビオン！発艦！」

ノリノリだなあオイ。（汗）

「ランスロットアルビオン！発艦！」

フットペダルを踏み、加速を付けて飛び出した。

コレから先は分からない。でも、ひとつだけ分かるものがある。『生きる力』、それは『未来を切り開く力』だと。』

To be continued…

## 第一話 これからすること（後書き）

どうでしたか？主人公機体は自分で悩みに悩んでランスロットアルピオンにしました。この機体選んだ時は元のパイロット、スザクの賛否両論の話もあつてか、少し出すのに抵抗がありました。「好きな機体なんだしいんじゃない？」と言った楽観的な判断で出しました。カッコいい機体だし……。orz

感想、アドバイス、クレーム待ってます。

## 第二話 初陣、そして会合（前書き）

どうも。更新しました。アクセス見ると300件来てました。こんな二次創作でも見てくれることはありがたいです。

さて今日は戦闘シーン書いて見ました。短いけど（笑）感想、アドバイスお待ちしております。

## 第二話 初陣、そして会合

前回、機体を選びこれから始まるサバイバルに参加することになった翼はバトルフィールドである異世界に降り立った…。

とりあえず、先ず俺が言える事。それは…

「人いなくね？」

そう、今俺は極々普通の日本の市街地の上を飛んでいる。家とかも立っていた。なのに、熱源センサーや目視で確認しても人らしき物すらないのだ。さらに…

「アルビオンのG相当なのに、耐えてる俺のボディ何ぞ？WWW」  
アニメ見てたから分かるけど、あの加速Gは乗ってたスザクもマズイだろ、と思うくらいだったし。俺いつの間にかスーパーマン？（  
）

そんなこんなで思考していると熱源反応があった。

P i i P i i P i i !

「敵か！？」

カメラを最大望遠にして確認する。

特徴的な緑色の装甲にモノアイ。マシンガンを手持って二、三機突っ込んでくる。量産型の代表格「ザク？」だ。もうひとつ言うな

らやられ役の代（ry）  
そんなこんなで一通り確認した後、手持ちのスーパーヴァリスを構えて突撃する。

こちらの動きに気付いたザク？はマシンガンを乱射して迎撃する。  
それを持ち前の機動性を使い回避する。  
そして真ん中のザクにヴァリスを撃ち込む。

ドオオオオオオオン！

轟音と共にザクが一機地に伏せた。

「よっしゃ！」

そのまま空中で、エナジーウィングを大きく開いてビームの刃を連射する。

反応が遅れたザクが 蜂の巣になる。

ドオオオオオオオン！

「二機目！」

そう言つて最後の二機を確認したがいなかった。

「逃げたのか…？」

そう思い機体を後ろに反転させたのが間違いだと俺は思い知らされた。

突然最後のザクがブーストをフルスロットルにしてヒートホークを構えながらアルビオンに突撃してきたのだ。

「！？」

咄嗟にヴァリスを構えようとしたが今から撃つても間に合わない  
悟った俺は、ブレイズルミナス・シールドを展開して防御した。

ガキイイイイン！バチバチバチバチ！

「くっ！」

ザクはそのままランスロットを地上に落とそうと加速させる。

「俺に…触れるな！！！」

激昂してフットペダルを踏みブーストを最大にする。そして、シールドでヒートホークを弾くとコックピット付近に付いてるレーザーバイブレーションソード（以下MVS）を左手で抜きそのままザクを横に斬りつける。

「おおおおおりやああ！！！」

バターの様に切り裂かれたザクはそのまま空中で爆散した…。

戦闘が終わり俺は近くの山の森にランスロットを降ろした。

そして、先程の疲れを取るために近くの川で顔を洗った。

川では魚が泳いでいて空には鳥が飛んでいた。

「とりあえず、人間以外は存在しているみたいだな…」

顔を洗い終わると俺は木に腰掛けて先程の戦闘を振り返った。

油断した。まさか、量産型でもあれほどとは…。正直言って危なかった。もし、あの時判断を誤ったら…。

そんな事を考えてると、昔の事が脳裏に過った。

血塗れの暗い部屋…

手には包丁を持った強盗…

そして目の前には…母と父』だったもの』…

そして、今にも殺されそうな自分…

男が近づいてくる…

コロサレルノ？コンナトコロデ？ママモパモシンダノニ？ボクモ  
…？イヤダ…シヌノハ…コワイ…イヤダイヤダイヤダイヤダイヤダ  
イヤダイヤダイヤダイヤダイヤダコワイコワイコワイコワイコワイ  
コワイコワイ…！！！！

「うわああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

……………。

「！！？…夢か…」

いつの間にか過去を夢にしてみていた俺は木で寝ていた。  
何故か回りには鳥が集まっていた。肩やら足に乗っていた。

「お前達。こんな俺でもいて…くれるのか？」

頷く様に鳥が羽を広げる。その鳥を優しく撫でる。

て…いかにいかに。こんな所見られたら恥ずかしい（へ）  
さっさと退散しよう…。

「油断大敵か…次は気を付けないとな…。」  
そう呟いてその場を後にした。

それから戻ってランスロットの調整をしていると、何やら熱源センサーが反応した。

「何だ？」

その物体は空中にいた。飛行タイプって事は…俺以外の19人の  
だれか!?

しかもこっち来てるしorz

くんな、帰れ!、なんて思ってたらくんに降り立ってしまった。そして、とんでもない機体だと気付いた。

「ガンダムキュリオス!?!うわゝマジ無いわゝ。」

機動性ならまだしも、パワーとかだと勝負にならないわ。(泣)  
とりあえず、こちらの位置はバレてなさそうだからコックピットから降りて近づいて見ることに。

少年移動中…

パイロットどんなかな?もしかして二重人格者?

「楽しいよなあ?アールヤあ!」、とか言ったら即刻敵と見なす!

そうこうしている内にキュリオスの近くに着いた。コックピットが空いてるからして外に出たようだ。このまま様子を見たほうがよさそうだな…。と思っている。

シュツ！

後ろからナイフを突き付けられた。

思わず両手をあげて戦意が無いことを示す。

「誰だ？」

強気な声だが凜としている。女か？

「目的は何だ？答える。」

いやいやいやいや、そんなナイフ突き付けられても（　　）と  
か思いつつ、横のナイフに視線を向ける…。

……………へ？このナイフって……………まさか、いやバカな…

いや、試してみるか。

「昔あるところに、白神と言う少年とその親戚に天野と言う少女が居ました。二人は仲良しでしたが、ある日川で溺れていた彼女をた  
s…」

そこまで言おうとしてナイフが更に深々と突き付けられた。  
痛い！痛い！やめてって！

「！？なんでそれを！？貴様何者だ！？」



### 第三話 確認、奇襲、ザ・ワールド！（笑）（前書き）

どうも。投稿します。今回は、まああれっスね。作者の自己満多いかも知れないッスね。

よくよく数えるとリアル系そんなに多くなく、大体がガンダムとか占めるかもですね。まあ、そこは多めに見て貰えると嬉しいです。それと、1000PV突破しました。皆さん御愛読ありがとうございます！

さあ今回は、人気の高そうな機体などをちらほら出しました。是非見てください！

### 第三話 確認、奇襲、ザ・ワールド！（笑）

前回、異世界に降り立った翼はアルピオンの初戦闘でザクを撃退する。そして、新たなる参加者の一人は幼馴染みの翔子という人物だった…。

……一応今の状況を確認しよう。

機体は森に隠した。そして、空いていたマンションの一室を使っている。で、俺の目の前では翔子が飯を食ってる。

うーん。何か気まずい…。

「どうしたの？食べないの？」

さっきとは違って柔らかかな口調で話しかけてくる翔子。ほんとにア  
○ルヤなんじゃねえの？

紹介が遅れたがこいつは天野 翔子。俺の幼馴染みで、何と武門の家柄の一人娘。  
それこそ、

『二千五百年の演習を積み重ねてきた武門の家柄が…!!』とか言  
つとる某御大将並みに強い。wwww  
まあ、俺も空手やってたし、そればかりは負けないんだけどね。

そんなこんなで幼馴染みやってるんだが、住んでる町は違う。数年前に俺の家が引越したからだ。その後の翔子とやり取りは文通ぐらいだった。

実はこれが結構恥ずかしい。ま、この話は後々に。

場面を戻そう。今の時間は夜。一応機体を見つかりにくい森の奥に隠して、その後は人がいない町に二人で赴いた。町の物はそのまま、食べ物もある程度調達できた。あー、大体某ライダーのミラーワールドでも想像してくれ。

それで、今はランプを付けて暗い部屋で食事ってところだ。ここまで考えて0.5秒。翔子に返事を返す。

「ああ、食べるよ。」

そう言ってコンビニのおにぎりに手を伸ばして一口。うん、うまい。腹が減っては戦はできん。

「所で、お前も誘われて参加したのか？」  
その問いに翔子は答えた。

「うん。何か学校の帰り道で変なのに吸い込まれて、気付いたらここにいた…。」

やっぱりこいつも過去の事が起因してるか…

「そうか。一応聞くけど、お前はこれからどうする？」

翔子は一旦悩んだ素振りを見せて答えた。

「いく宛もなかったし、翼がいいって言うなら付いて…いきたくないな

∴ / / /

恥ずかしいのか俯いてる。そついや、昔から俺の後ろ付いてきてたっけ。何かこつちも恥ずしいな。

「分かった。そつちが言うならいいぞ。幼馴染みがいるなら仲間にしても背中預けれるしな。」

そこまで言うと、翔子が顔を上げた。

「うん！ありがとう！」

笑顔が可愛いすぎる。何このギャルゲ展開www今ならブロマイド発行して売る自信あるわ（笑）

暫くは二人で食事しながら談笑。眠たくなり、寝ることにした…。

時刻午前0時…

二人とは違う場所でそれは起こった。

見渡す限りの廃墟、そこに二つの機影があつた。

一つは全身灰色の機体。胸にX字の後がある。

もう一機はガンダムタイプ。背中には特徴的な6つのバインダー！。

そして、右手が光っていた。

灰色の機体のパイロットが叫ぶ。

「ゲハハハハ！！このターンXすげえな！これがありゃあ俺は最強だ！！アハハハハハ！！！」

ターンXは縦横無尽に建物を破壊していく。それをガンダムタイプは綺麗に避けていく。

「力に溺れたか…こいつは我の手で！」

男は技名を叫びながら右手を突き出す。

「爆熱！ゴッドフィンガー……！」

「邪魔だあああああ！！フルパワー！シャイニングフィンガ  
……！」

『バリバリバリバリバリ……！』

手と手がぶつかりあい、周りは瓦礫が舞い続けた……。

翼side

何処だ？ここ。

辺りは暗く何も見えない。

「……………殺した……………」

！？…何だ？こりゃあ……………あの……………。

「お前が殺した……………」

やめる……

「命が……欲しかったんだろ………?」

やめろ……!

「家族………奪われたから………殺したんだろ………?」

やめろ……!

「なあ、だから………」

背後には何かが………それは………

「もっと殺せよ………敵を………」

血塗れの自分だった。

「うわあああああああああああ………ハア………  
ハア………」

何だ、夢か…。

くそ、何だつてこんな夢みんだか。

とりあえず、起きよう。そう思い、体を起こす。しかし…、

「？」

動けない。よく見ると…

「！？なんで翔子が俺の横で！？」

翔子が俺の腕を抱き枕にして寝ていた。別々で寝たのに！何故か離そうとしてもビクともしない。

挙げ句の果てに、

「うん。むにゃむにゃ……翼……。」

とか言う始末。

俺は少しため息をついて起こす。

「翔子。朝だぞ起きろ。」

「うん。あ、おはよー翼。「全くこいつは…

そう思いつつ嬉しそうな顔につい顔が緩む。

「ああ、おはよう。」

その後、俺たちは朝食をした後その場を後にした。

A . m . 1 0 : 0 0

俺たちは今空を飛行している。横目でキュリオスを見ながら翔子に疑問を話す。

「所で何でキュリオスなんだ？」

「うん！空飛びたかったから。」

即答。しかし、人の事は言えないが人間は自分に無いものに憧れるらしい。

まあ、これ以上は聞いたら野暮つてもんだ。そこで、質問を打ち切り、レーダーに視界を通す。

「熱源なし。異常もない。」

町の所を見て異常がないか確認したが…

「！待つて！」

「おわ！？何だよ翔子。」

「しっ。…何かいる…。」

そういや、昔から勘はいいんだよな。だから、俺はこいつには嘘はつけない。

「！？前方からマシンガン！来るよ！」

「くっ！」

何処と無く弾幕がくる。それを機動性を駆使して回避する。機体の体制を戻して、思考する。

『消えてるって事はミラージュコロイドか？いや、ブリッツにはマシンガンは搭載してないしな…。となると結論は一つ！』



陸戦を重視しているアーバレストでもその機動力は計り知れない。予測して撃っているのにまるで当たらない。

次の瞬間、ヴァリスの威力に耐えきれなくて舞い上がったビルスの瓦礫をなんとアーバレストは足場にして接近してきた。

流石に予想外なので回避をしようと、機体を動かそうとした瞬間、コックピットに鈍い衝撃が起きた。相手はワイヤーガンを使って、ランスロットの脚に絡めていた。

単分子カッターを引き抜き襲いかかるアーバレスト。

「ちい！」

ルミナスシールドを展開して防御。

バチバチバチバチ！

「翼！」

キュリオスがマシンガンで牽制しようとするが、

ドガンッ！

「きゃっ！なっ何!？」

キュリオスの遙か下にマシンガンがもうひとつ真上を向いて自動制御で弾をキュリオスに撃っていた。つまり、俺たちは始めから相手の術中にハマっていたのだ。

そして、マシンガンに気取られているキュリオスにアーバレストはカッターを再度口に戻してワイヤーガンで脚に引っ搔ける。そして、両腕を使い、二機を引きずり降ろす。

「っしまった！」

やられてたまるか！俺と翔子はそのままフットペダルを踏みブースターを最大にしようとするが時既に遅し。そのまま地上に叩き付け





第三話 確認、奇襲、ザ・ワールド！（笑）（後書き）

どうでしたか？

まあ、○○フィンガー！やらコッ○パンやら絶好調である！（笑）  
など色々出しました。もっと出さないといけないので、頑張ります。  
感想やらアドバイスまっています。

## 第4話 神、談笑、状況（前書き）

更新遅れてすみません。

バイトをはじめまして、中々時間が取れなくて…

今回は、少なめです。無理をせずに投稿していきます。それでは。

#### 第4話 神、談笑、状況

とある空間。そこで、何かが空間に映し出されている地上の様子を観察していた。

???

「おー。派手にやってるな。死人は…まだ誰もいないな。」

それが見ながら呟いていると、後ろから両手なるものが出てきた。

手

「彼らはこれからどうなっていくんでしょうか？」

少し唸りながらそれは答える。

???

「さあ、人つてのは何処までも貪欲だからな。本能に忠実で時に愚行を犯す。そんな人間にも生きざまつてのがあってね、特に日本人とか武士道とかそんなのあるでしょ。私はそれに賭けてみたい。」

そして手を見やり問う。

???

「これを愚かだと思っかい？」

手

「いえ、貴方の意志は私の意志。何処までもお付き合います。『神様』。」

神

「そうか。」

さっそく何だけど調べ物頼める？」

手

「何なりと。」

神

「とある場所で異常なまでの空間歪曲が確認できた。それを調べてもらえる？」

手

「畏まりました。しかし、それは一体……」

眉間に皺を寄せて神が答えた。

神

「何かどさくさ紛れに変なものが入ったみたいだ。力の程度は知らないけど、ほつたらかしにすると参加者に有らぬ被害が出ちゃうから。」

手

「分かりました。早急に支度します。」

手は姿を消した。

神

「さて、君たちはどうする。子供達よ。その命の灯火、私に見せてくれ。」

何か楽しそうにに神は笑うのだった…。

前回、突如襲撃したアーバレストを迎え打ったアルビオンとキュリオス。しかし、相手はそれを上回る技術で二機を圧倒。直後の通信でパイロットは倒れてしまった…。

P . m . 1 2 : 3 0 翼 s i d e

とりあえず、俺たちはあの戦闘の後に機体を回収。パイロットは死にかけていたのでコックピットから引き摺り下ろした。飯がどうか言ってたので、前に持ってきた食料を分ける事に。

???

「かあ〜!!うめ〜!!久しぶりの飯だ〜!!」

ガツガツガツ!バリバリバリバリ!ベキバキボリ!

時折あらぬ音が聞こえたが…

何、気にすることはない

(川、ー、)

丁度昼時だったので俺たちも食事をしている。

因みに、俺は幕の内弁当。翔子は鳥五目。

大体食べ終わると向こうが喋り始めた。

???

「いや〜助かった！ホントにありがとう！俺は荒井 勇谷！よろしくう！」

初対面なのにフレンドリーだなオイ。嫌いじゃないが。

翼

「俺は白神 翼。ランスロットのパイロットだ。」

翔子

「私は天野 翔子。キュリオスのパイロットだよ。よろしくね。」

一通り自己紹介をして本題の質問に入る。

翼

「さて、アンタもこのゲームの参加者って事で間違いないな？」

勇谷

「うん。そうだよ。それにしても君達若いね。何歳？」

それは此方も気になった。

服装を見るからにどっか旅でもしてたんだろうかと思うくらいに服はボロボロ。体にある傷の数々。それであって顔はイケメン、とよく分からんパーツで出来ていた。

翼

「俺たちは二人とも18。学生ですよ。貴方は…」

勇谷

「俺は20」

どうにもそうは見えないです、はい。

翔子

「年齢詐欺ですね。分かります。」

翼

「俺の心を読むな。」

翔子

「だめ？」

何故泣く…まあ、可愛いからいいや。じゃなくて！  
頭を振るって話題を変えた。

翼

「貴方も若いですね。とてもそうは見えない。」  
納得したかの様に笑う荒井。

勇谷

「ハハハ、そうだな。これでも色んな所を旅してる身でね、今回は、  
その途中なんだな。」

それを聞いて俺は気になった。只の冒険家なのにあれほどの操縦テ  
クは段違いだ。なら軍とかに在籍してたんじゃない…。

翼

「貴方、何処か軍とかに在籍してました？」

すると驚いた目付きでこっちを見てきた。

勇谷

「これは驚いた。あれだけで分かったのかい？」

翔子がそれに答えた。

翔子

「私達武術を習ってて…それで私も只者じゃないって思ったんです。

」

勇谷

「君達は凄いな。確かに以前、俺は日本自衛隊にいたよ。」

少し頭を掻きながら困った風に説明する荒井。

翼

「答えられないようだったら、無理しないでください。」

そう付け加える俺に荒井は言う。

勇谷

「いやいや、問題ないよ。ただ、少し休みたいな。死にかけてたか

ら。(笑)」

そういつて、少し寝転んでしまった。

翼

「全く…まあここは激流に身を任せて…」と

翔子

「あ、私も」

そういつて休むことにした。

T o b e c o n t i n u e d . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6550j/>

---

未来を掴むために...

2010年10月11日11時12分発行